

丹後郷土資料館調査だより

2014 年 3 月 28 日 第 3 号

ごあいさつ

「飛び立ちかねつ、鳥にしあらねば」 (万葉集より 山上憶良)

本歌とは趣旨を異にしますが・・・。

府立郷土資料館のあり方について、この間、種々の議論がありました。丹後郷土資料館も、これまでの歩みを捉え直し、これからの姿を考えながら、日々の活動に取り組んだ一年でした。議論の切り口はいろいろありますが、今後のあるべき姿を考えると、ひとつ確信していることは、館名に「丹後」を冠するかぎり、当館の根はこの地にあること、また、それが当館の存在することの意義ということです。

当然、丹後地域の歴史と文化の特徴を浮き彫りにすることは、他地域との比較研究という広い視野が求められますが、「調査だより」が、当館の深くこの地に根ざす歩みとなることを願いながら、第3号のごあいさつといたします。

京都府立丹後郷土資料館 氏 松 昌 平



永島家紙漉のスキブネ（左）
と食用具（右）

平成 25 年度永島家を民具
の常設展示室として、ラベル
を付け架設整備した。

目 次

■ ごあいさつ	館長 氏松昌平	1
■ 「久住遺跡出土の土器について」	長谷川達 瀬古諒子	2
■ 「成相寺参詣曼荼羅に見る負子型笈について」	横出洋二	6
■ 「北野社勧進状について」	吉野健一	10
■ 平成 25 年度の資料整理	資料課	18
■ 2013 年度のあゆみ	総務課	20

くすみ 久住遺跡出土の土器について

資料課 長谷川 達
瀬古 諒子

はじめに

ここに紹介する資料は、2000年に実施された圃場整備工事の際に採取された。付近は周知の遺跡として登録されていて、工事に先立ち、1997年から2000年にかけて試掘・発掘調査が実施され、その成果が報告されている⁽¹⁾。本資料は調査地から少し離れた地点で線的に深く掘り下げられた水路工事の際に出土している。

1 遺跡の概要

遺跡は京丹後市大宮町久住に所在する弥生時代から中世にかけての集落跡である。丹後半島を貫流して、日本海に注ぐ竹野川の上流域にあたり、谷幅200m前後の狭隘ともいえる谷部に立地している。川の両岸に形成された小規模な河岸段丘や扇状地を利用して、久住では弥生時代後期以降、断続的に集落が営まれている。報告によれば、弥生時代後期や古墳時代中期の流路や7世紀代の竪穴住居跡などの遺構が検出され、遺物からは中世までたどることができる。

出土地点は、ほぼ南北に流れる竹野川の開鑿谷に形成された小規模な扇状地にあたり、伏流水が豊富なため、樹木等の有機物も遺存していた。発掘調査区の南にあたり、深いところでは圃場面下2m以上を測った。断定はできないが、第4次調査の際に検出された流路SD08の下流部にあたる可能性がある。

2 遺物について

採取された資料は、整理箱3箱程度あり、大半が土器類である。ほかに少量の須恵器、赤色顔料が塗布された木製容器の破片と打製石斧がある。図示した土器類の器種には、甕、壺、鉢、高杯、器台がある。

甕は、器体の大小はあるが、口縁端部外面に擬凹線を施し、胴部外面ハケ調整、内面ヘラ削りのものが大勢を占める。口縁外面幅は狭いもの(4・

5) から広いもの(12・15)まであり、12は擬凹線を施していない。図示していないが、クシ原体で施した列点文を巡らす甕の胴部破片がある。この施文は、大山墳墓群や裏陰、志高遺跡等にも見られる。11は小型の壺で精良な胎土を持ち、胴部に把手を付ける。高杯、器台、小型壺、鉢類には、内外の可視面にミガキのかけられているものが多い。水中にあった為か、器表に光沢を残すものもある。32は浅い直線的な杯部を持つ高杯で、口縁端部には面を持つ。中空の円筒形の脚部が付くもので、別個体の脚部も出土している。25・27は砲弾形の有孔鉢で、焼成前に穿孔されている。25は底部付近にタタキ成形痕を残している。同様に19・20も底部付近にだけ、タタキ痕が残るが、その多くは消されている。34～39は器台で、39は器高10.3cmを測る。ともに口縁外面には明瞭な擬凹線を巡らせ、34は受部外面に半円形の把手が貼り付けられている。

土器類の時期は、弥生時代後期中葉から後葉に属し、ある程度時間幅がある。

打製石斧は刃部にむけて幅を増す形で長さ18cmを測る。弥生後期よりも古い時期に属する可能性が高く、縄文時代の所産とも考えられるが、該当する土器類は現時点では検出されていない。

おわりに

ここに紹介した土器類は、弥生時代後期、丹後地域において盛んに台状墓が造られ、副葬品の増加や墓の大型化等から、丹後地域の興盛が語られる時期に当たっている。墓の様相については、比較的多くの知見が集積されたが、それに対応する集落の様子は必ずしも明確になっていない。しかし、その時期を特徴付ける擬凹線文を施す土器類の出土は地点数・量ともに多い。本遺跡が所在する、「三重谷」と通称される約7kmの竹野川上流域だけでも、他に三重⁽²⁾・松山⁽³⁾・沖田⁽⁴⁾・延利⁽⁵⁾の各遺跡が知られている。遺物は出土するものの、遺構としては溝、流路等に止まっている。

丹後地域全体において、この時期の建物跡が検出された遺跡には、京丹後市で本遺跡のやや下流にある谷内遺跡⁽⁶⁾、裏陰遺跡⁽⁷⁾や大山遺跡⁽⁸⁾、岩木遺

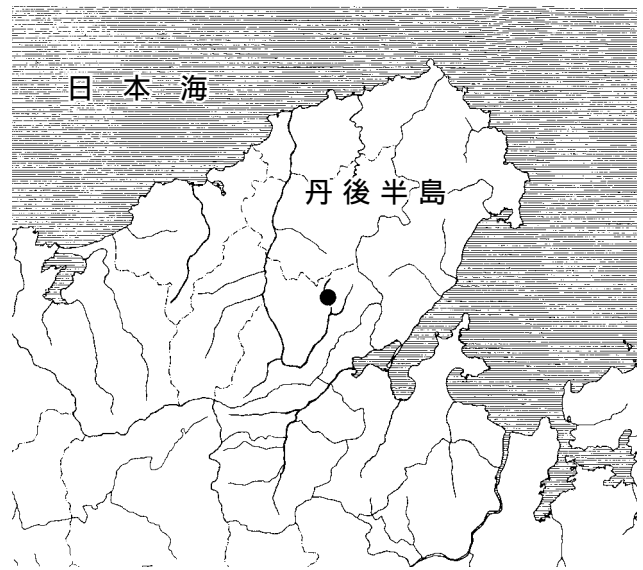
(9) 跡、奈具岡遺跡⁽¹⁰⁾、林遺跡⁽¹¹⁾、宮津市桑原口遺跡⁽¹²⁾、舞鶴市志高遺跡⁽¹³⁾など、各地に点在している。しかし、調査範囲が限られ、集落の様相を知るにはほど遠いのが現状であり、時代を復原できる資料の増加と集約が必要となっている。

参考・引用文献

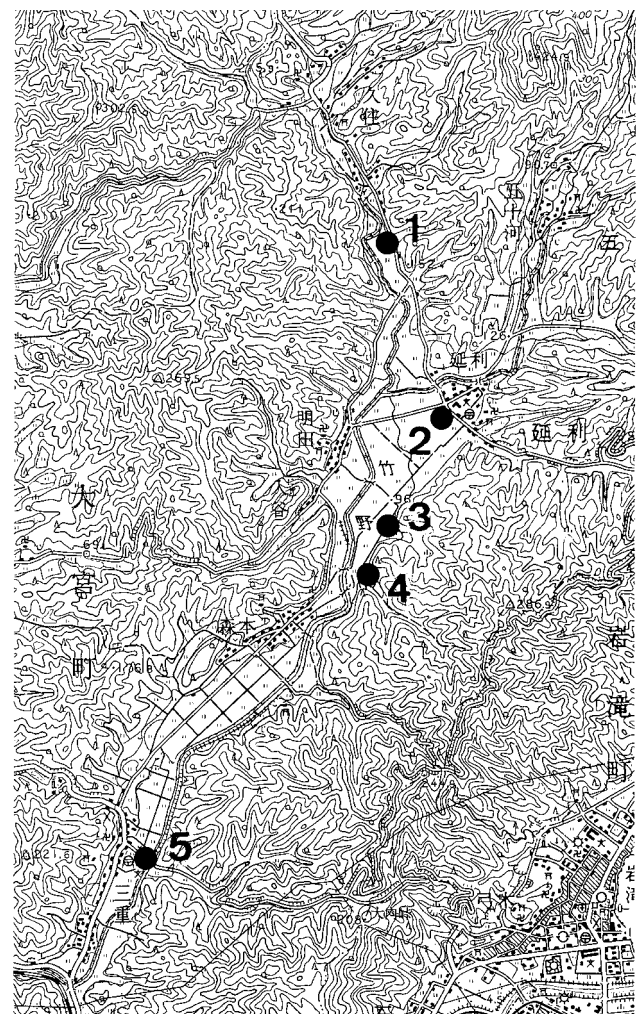
- (1) 「久住遺跡発掘調査概報」大宮町教育委員会 2000
- (2) 「同志社考古9」関西考古学研究者連合 1972
- (3) 「京都府遺跡調査報告集」第146冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2011
「松山遺跡第6次発掘調査報告書」京丹後市教育委員会 2011
- (4) 「京都府遺跡調査概報」第99冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001
- (5) 「埋蔵文化財調査概報」京都府教育委員会 1994
- (6) 「京都府遺跡調査概報」第28冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988
- (7) 「裏陰遺跡発掘調査概報」大宮町教育委員会 1979
- (8) 「丹後大山墳墓群」丹後町教育委員会 1983
- (9) 「岩木遺跡」丹後町教育委員会 1989
- (10) 「奈具岡遺跡発掘調査報告書」(財) 古代学協会 1985
「京都府遺跡調査概報」第87冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999
- (11) 「林遺跡発掘調査報告書」網野町教育委員会 1977
- (12) 「埋蔵文化財発掘調査概報」京都府教育委員会 1971
「京都府遺跡調査概報」第75冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997
- (13) 「京都府遺跡調査報告書」第12冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989



打製石斧

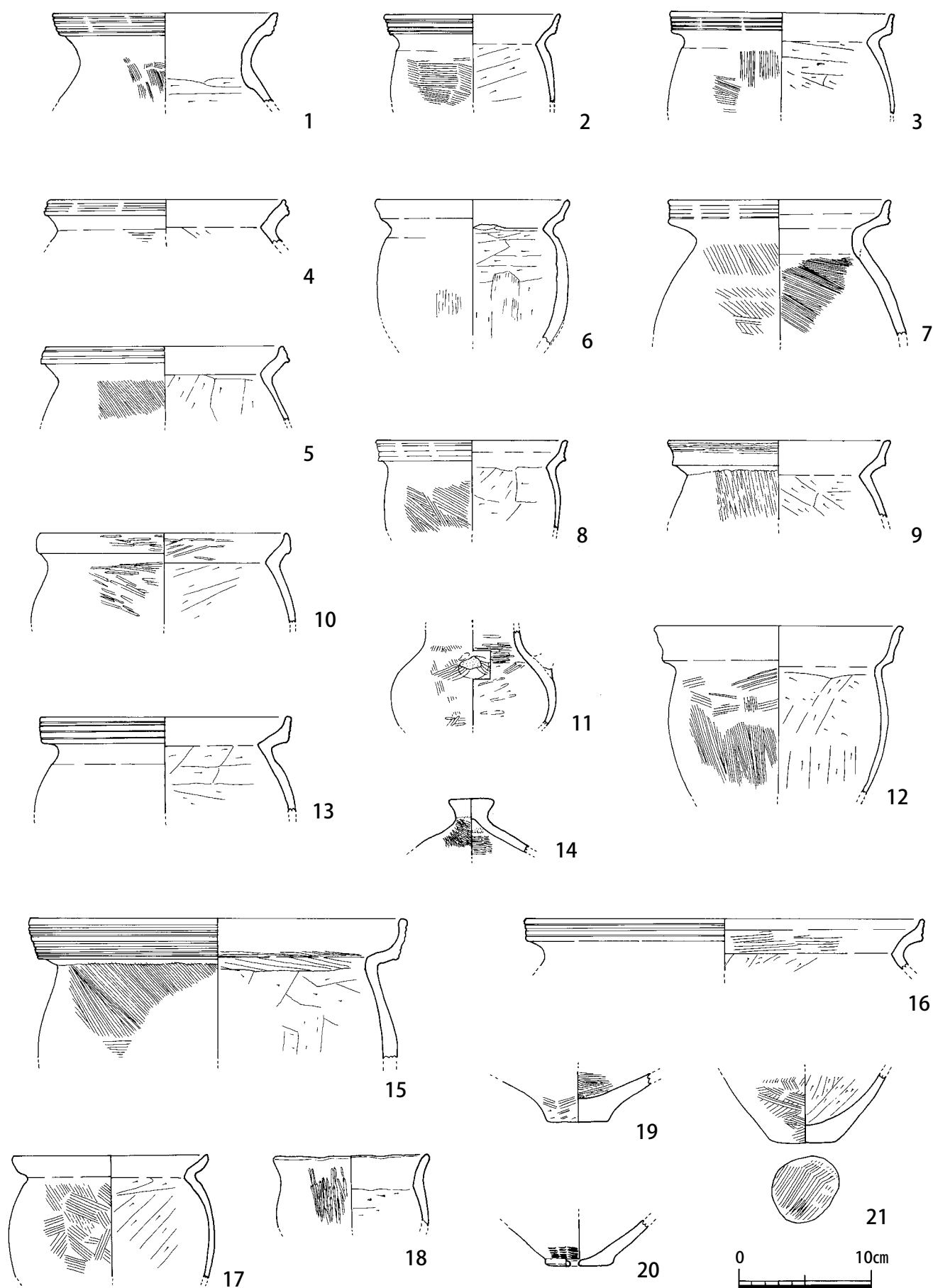


久住遺跡位置図

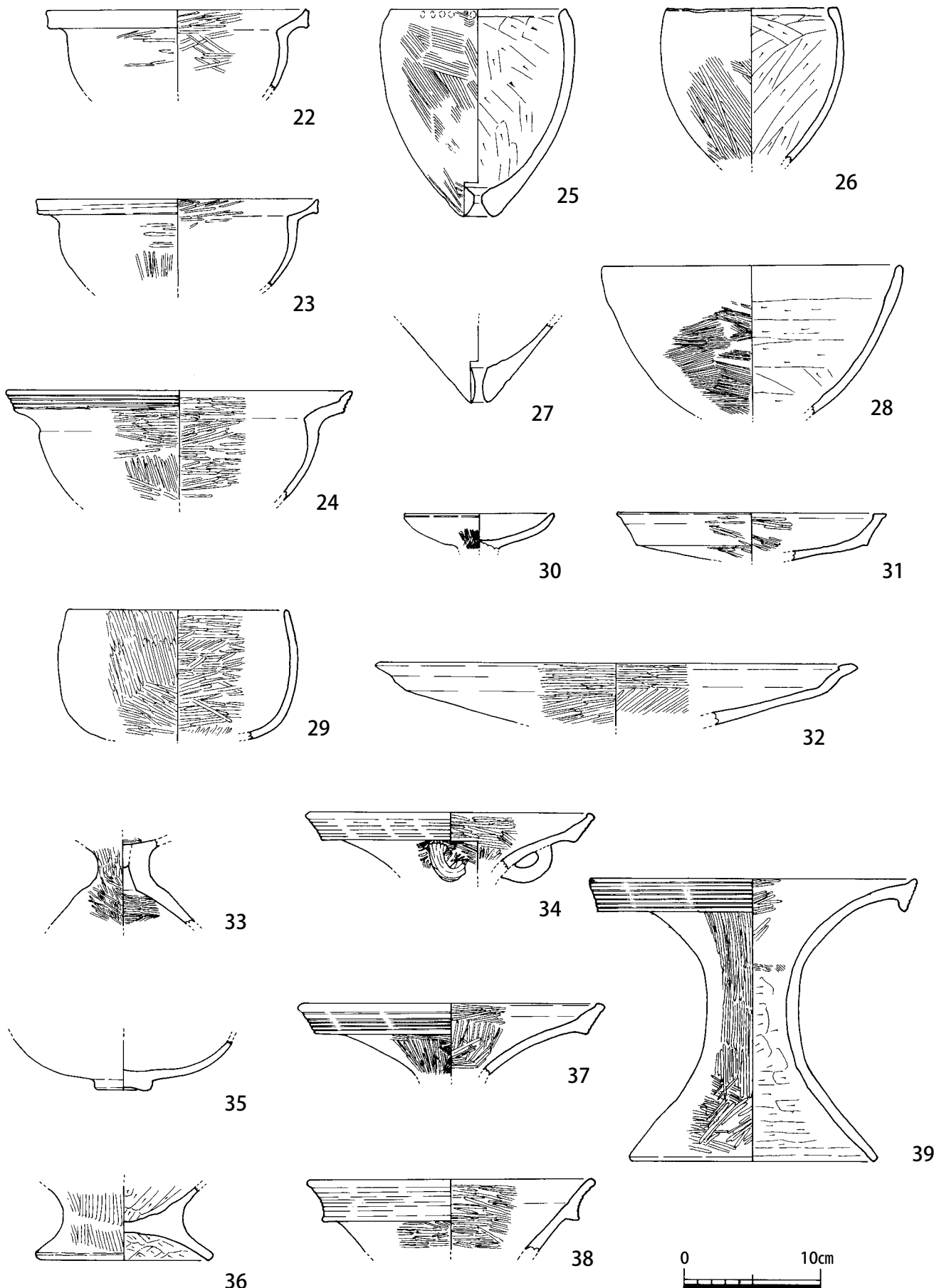


三重谷の弥生時代後期遺跡

1. 久住 2. 延利 3. 沖田 4. 松山
5. 三重



土器実測図 (1)



土器実測図 (2)

成相寺参詣曼荼羅に見る負子型笈について

資料課 横出 洋二

はじめに

一昨年特別展で「丹後の背板」を開催した。^(注1)背板は民俗学・民具学において一般に「背負梯子」と標準名で呼ばれている杵型の背負い運搬具で、丹後から北陸にかけて背板と呼ぶ地域が多い。標準名に関しては、織野英史氏が関東地域の一部での地方名であることなどから疑問を投げかけている。^(注2)本稿では、特別展の図録で使用し、同氏が近年使用する「負子」で統一する。

負子は戦前から考察対象とされた民具である。注目されたのは地方名の地域差の他、縦木に荷を支える爪の有無で、その分布が日本の東西で基本的に二分される点である。^(注3)丹後の背板も無爪の負子であり、分布上、無爪負子のほぼ西の境界にあたる。

その東西差について最初に考察したのが磯貝勇氏で、その差は東西で負子の祖型が異なっていたことによると考察した。^(注4)つまり前者は藁製の背中当・板製の背中当から杵付きの背中当へと変化して独立した運搬具になったもの、後者は朝鮮半島の叉木を横棧で組んだ背負い運搬具チゲが伝来して、日本で変化したものと述べている。有爪型は縦木が大きくハ字に開いたチゲとほぼ同型で、それが伝播したと見るA型と、矩形のB型とに分け、後者は前者の亜流としている。この考察の基本は小野重朗氏、下野敏見氏の論考でも継承された。^(注5)

以上の2系統の祖型論のうち無爪型負子の祖型論について織野氏は、背中当が杵型の負子になるには無理があると疑問を呈している。背中当祖型論の論拠の一つとされる木杵付藁製背中当、小型木杵背中当の発生はすでに使用されていた杵型負子との接触によらなければあり得ないと若狭の背中当の調査から論じている。^(注6)

本稿では西日本の有爪の問題は置くとして、無爪型の祖型の問題について絵画資料から若干考察してみたい。

1 「小野雪見御幸絵巻」の背負い運搬具

最初に事例資料として紹介するのが、東京芸術大学美術館所蔵の鎌倉時代末に製作されたとされる「小野雪見御幸絵巻」に描かれた負子に似た背負い運搬具である。この絵巻は白川上皇が洛北小野郷に隠棲した後冷泉皇后歎子を訪れる様子を描いたもので、これには山中で薪を運ぶ家族風の人物が描かれている。^(注7)薪は馬の背に積まれ、また男が杵に刺して肩に担ぎ、子供が頭上で、そして女が負子風な道具で胸縄式の負縄で背負っている(図1)。この道具は平行する2本の縦木で、束にした薪を何束も上下に乗せている。薪と棒が何かで固定されているかは窺えない。また縦木に直角する横棧が描いていないので杵型かはわからない。見ただけでは、薪の束を並べてそこに2本の縦木を直接各束と結んで固定しているように見える。平行する縦木に荷を固定する点では負子と同じだが、杵型でない点では異なる。なお背中当相当のものは描いておらず直接背中に当てている。

この資料に関しては織野氏がすでに紹介しており、同時代の写実的な宋画との関係で、人物や物については実際のスケッチ無しでは描けない、頭上運搬は中国では見られないなど、実際の日本の風俗を描いたものとしている。^(注8)

2 絵巻物に描かれた笈

「小野雪見御幸絵巻」以外の中世の絵巻物に描かれた背負い運搬具をみたい。『絵巻物による日本常民生活絵引』^(注9)では背負い運搬具として負縄と笈を紹介しているが、負子と同様の井桁杵型の背負い運搬具はない。筆者もあらためて『日本絵巻大成』(中央公論社 全26巻別巻)、『続日本絵巻大成』(中央公論社 全20巻)をテキストに全巻調べたが、負縄と笈だけで、井桁杵のものは見いだせなかった。

負縄は荷を背中に固定する縄で、負縄運搬は近代以降も使われた。絵巻では、服装からして一般人が俵などを背負っている。^(注10)笈は服装から僧侶や山伏など宗教者が使用しており、箱状のものと板状のものとがあり、それぞれ箱笈、板笈と称する。板笈には背面に収納の籠を取り付けたものも

^(注10)ある。その他円形・楕円の籠に負縄を付けた籠も僧侶が背負っているものが見られる^(注11)（仮に籠笈と呼ぶ）。

絵巻物は宗教家などの伝記をテーマにしたものであるため、庶民の多様な運搬具を描かなかったとも考えられ、即断はできないが、「小野雪見御幸絵巻」を除き、絵巻物だけからすると、中世における背負い運搬具は、宗教者が笈を使い、庶民は負縄だけで、笈のような特別な運搬具は使用しなかったのではとの推測ができる。

さて負子との関係で比較的近いのが板笈である。板笈は逆U字型の枠に板を張ったもので、ランドセル式の負縄を取り付けて背負う^(注12)。今でも修験道において正先達^{しょうせんだつ}が背負い、縁笈ともいう。枠という構造で負子と同じだが、1本の逆U字枠と4本の角材を井桁に組むという点において両者は構造的に異なる。荷を乗せるのも、板笈は板面を利用し、負子は平行する柱に固定する点でも使い方が違う。板笈から井桁枠の負子へと構造的に変化したとは考えにくい。変遷という点では、「小野雪見御幸絵巻」の平行する2本柱に、横棧を組んで固定した枠形になったと考える方が自然である。しかし、中世の絵画資料では現在この1点だけで、後は近世中期の絵画となるので、平行棒や板笈から変化したことを論証する資料が不足している。そこで中世から近世にかけての負子の成立を考える上での1資料として参詣曼荼羅に描かれた枠型笈について紹介したい。

3 参詣曼荼羅に描かれた負子型背負い運搬具

参詣曼荼羅は勧進聖などが、巡礼の案内として付属の寺社の縁起や功德を説いて絵解きをするのに利用したと考えられている^(注13)。1幅の画面に寺社の堂舎を描いた境内図を大きく描き、そこに縁起などの物語の場面を描きこんだりする。そして境内の内外に参詣する多くの人物を描き、寺社の賑わいの様子を表している。参詣曼荼羅は16世紀から17世紀にかけて製作されており^(注14)、中世末から近世初頭の参詣客の風俗が窺える。

宮津市にある西国28番札所の成相寺にも16世紀に製作された「成相寺参詣曼荼羅」があり、平

成25年度の特別展「丹後国府と中世都市「府中」」に出展され、間近に拝見する機会を得た。画面の上半分に境内の門や堂舎を、下半分に天橋立と3本の参詣道、その間に僧俗さまざまな参詣者が描かれている^(注15)。

背負い運搬に注目して参詣者を観察していると、負縄を使っている俗人1人、笈を背負っている僧形の人物が2人見られる（写真）。僧形の内2人は足付きの箱笈を背負っているが、別の僧形の1人は井桁枠状の背負い運搬具を背負っている。僧に向かって左側は身体に隠れ見えないが、右側には1本の柱の上下に1本ずつ横棧が付いて、ほぼ井桁枠のものであることは間違いない。横棧は柱に重ねるように描いており、ほぞ穴に差して組んではいない。枠の中は着色されており（下棧との間は少し隙間がある）、板が張られているように見える。この背負い運搬具を仮に負子型笈とするが、画面ではこの笈を背負った僧は箱笈を背負った僧と道連れで、前者の僧は箱笈の僧を向いて前方を指さし、後者は背を向けて指さす方向を見ている。

成相寺参詣曼荼羅と同様な負子型笈は、他にも「長命寺参詣曼荼羅」「道脇寺参詣曼荼羅」「多賀大社参詣曼荼羅」でも描かれている。この中で「道脇寺参詣曼荼羅」も箱笈と負子型笈を背負う道連れの僧2人で、成相寺参詣曼荼羅と人物の配置、方向、所作、衣、背負い運搬具が同じである^(注16)。この曼荼羅では、負子型笈の背後に俵状の荷を背負っているが、枠の中に荷が見えるので板は張っていない。枠だけである（図2）。

「長命寺参詣曼荼羅」も箱笈、負子型笈の僧の道連れで、成相寺・道脇寺とほぼ同じ図像だが、両者幣付きの矛を肩に担いで、左の僧は前方を指していない^(注17)。負子型笈は僧の肩に隠れほとんど見えないが、左肩の上に柱と上棧の一部が見える。ここでは上棧は柱から突き出していない（図3）。

「多賀大社参詣曼荼羅」の人物二人は白い頭巾を被って白装束で、ともに前方を向き、幣付きの矛を担いで並んで歩いている^(注18)。ここでは両者ともに負子型笈を背負っている。肩越しに柱と上棧がクロスしたのが見える。荷は壺らしきものを背負

うが、板張りは不明である(図4)。

以上のように参詣曼荼羅には、絵画図像であるため詳細な構造は分からないが、負子と同じ井桁杵の筧を見ることができる。このことから戦国末には負子と同様のものが利用されていたことが分かる。ただ背負っているのが宗教者であり、一般庶民の利用は確認できない。井桁杵筧の発生が、「小野雪見御幸絵巻」に描かれているように農民が使用していた平行柱状の運搬具からの発展なのか、または「成相寺参詣曼荼羅」には板が張られているように見えるので逆U字型板筧が簡略化したとも考えられる。一方で中世以後民間の海外交流の活発化で中国など海外からの伝播ということも否定できない。いずれにせよ今後の調査・研究を待たねばならないが、参詣曼荼羅だけの資料から類推すると中世末に宗教者が背負っていた負子型筧が近世以後に庶民に広がったことが考えられる。

おわりに

負子の内、無爪型負子(丹後では背板)の発生は、先に述べたように背中当を祖型とし、それに木杵が付き、そして木杵を主体とした運搬具へと変化してきたと磯貝氏は類推し、織野氏は否定的な見方をされている。

参詣曼荼羅の負子型筧から中世末には、負子と同様な形態のものが存在しており、背中当と負子との中間的なものが歴史的変遷の中で存在するとしたら中世末以前になる。現在そうした資料は確認できない。参詣曼荼羅に描かれた負子型筧は、背中当らしきものは描かれておらず、直接背負っている。「道脇寺参詣曼荼羅」では、板や、横巻き縄などの緩衝具も無い。やはり背中当は負縄との関連で考えるべきではないか。負縄を背負う緩衝具として利用され、その後負子を背負うようになって負子の緩衝具として利用したと考えるのが自然ではと、考える。

(注1) 織野英史「第10章 名付けの責任－標準名選択の恣意性－」(織野英史『背負梯子の研究』慶友社 1999)

(注2) 文化庁編『日本民俗地図』Ⅳ交易・運搬 国土地理協会 1974

(注3) 磯貝勇「四 背負い梯子－背負い運搬と用具」(磯貝勇『日本の民具』1971)

(注4) 小野重朗「西南日本のカリコ(負い梯子)をめぐって」(小野重朗『民具の伝承 有形文化の系譜(下)』慶友社 1985)、下野敏見「第一章日本列島の背負い運搬具」(『日本列島の比較民俗学』吉川弘文館 1994)

小野氏は上著で有爪B型はA型の亜流で無く、西日本でも使用されていた無爪の負子に、A型の影響で爪を付けるようになったと論じた。

(注5) 織野英文「若狭湾小浜市の杵付背中当」(『近畿民具』35 2014)

(注6) 『日本絵巻大成 19 住吉物語絵巻 小野雪見行幸絵巻』中央公論社 1991

(注7) 織野英史「『小野雪見御幸絵巻』の背負子」『民具集積』7号 四国民具研究会

(注8) 渋澤敬三・神奈川大学編『新版絵巻物による日本常民生活絵引』平凡社 1984

(注9) 注8同書第1巻P.173

出典「北野天神縁起」

(注10) 注8同書第4巻P.185

出典「春日権現験記」

(注11) 注8同書第1巻P.76、P.134

出典「一遍聖絵」

(注12) 注8同書第1巻P.173

出典「北野天神縁起」

(注13) 西山克「社寺参詣曼荼羅についての覚書」『藤井寺市史紀要』第七集 藤井寺市 1986

(注14) 注13 西山克同著

(注15) 大阪市立博物館編『社寺参詣曼荼羅』平凡社 1987 図版24「成相寺参詣曼荼羅」

(注16) 注15同書 図版37「道脇寺参詣曼荼羅」

(注17) 注15同書 図版23「長命寺参詣曼荼羅」

(注18) 注15同書 図版52「多賀大社参詣曼荼羅」



写真：成相寺参詣曼荼羅



図2：道脇寺参詣曼荼羅



図3：長命寺参詣曼荼羅



図1：小野雪見御幸絵巻



図4：多賀大社参詣曼荼羅

「北野社勸進状」について

資料課 吉野 健一

はじめに

昨年秋、丹後建国 1300 年を記念して当館で開催した特別展「丹後国府と中世都市「府中」～雪舟の描いた景観～」に向けた調査を行う中で、中世府中に関する新資料が確認された。本稿では、その概要を紹介するとともに、全体の写真と翻刻及び釈文を掲載することとする。

1 文書の様式および現在の北野社

本資料は、丹後国与謝郡府中村（現宮津市小松）に存する北野社再興の際の勸進状であることから、資料名を「北野社勸進状」とした。現在は卷子に仕立てられており、縦 32cm、横 203cm に及ぶ。界高は 26.7cm、界幅は 3.5cm である。料紙は楮紙で、4 枚が貼継ぎされている。勸進状としての形態や文字、記載内容等から、巻末に記された天文 5 年(1536)に作成されたものと考えられる。小松地区で江戸時代には庄屋や酒屋などを務めていた小松家に伝来した。

さて、雪舟の天橋立図では小松地区背後の山上に北野社が描かれているが、現在は麓に鳥居と祠があり、地元で大切に管理されている。なお山上には、現在は妙見社の建物が存する。^(注1)

2 文字資料に見る北野社

府中地区の中世文字資料としては、丹後国分寺再興縁起（重要文化財、国分寺蔵）や籠神社文書、妙立寺厨子銘などがあるが、北野社に直接関わる文字資料はこれまで確認されていなかった。一方、16 世紀初頭に描かれたとされる雪舟の「天橋立図」には、建物と「北野」との書込みが見え、また近世の地誌類には記載が散見される。^(注2)^(注3)

享保 11 年(1726)の「丹後与謝海図誌」(天橋記)は貝原益軒が記したとされるが、同書は、天神社について、「天神社、小松村にあり、古図に北野といふ。永万元年小松重盛当国の任となりて、これを勸請すと也、天文丙申勸進沙門堯覚修補す、重盛当国下向、此所に館を置故に小松といふとなり」と記している。「天文丙申」や「勸進沙門堯覚」などが「勸進状」の記述と一致することから、「勸進状」が参照されたと考えられる。

また、宝暦 11 年(1761)完成の「丹後州宮津府志」

の天神社の項目には、天橋記の引用に続いて、以下の記載が見える。

「当村（小松村）庄官の家に沙門堯覚当社修造勸進の一軸あり左に記す、

丹後国与謝郡府中拝師郷北野宮、人皇七十九代六条院永万元年乙酉歳、小松内府重盛公依為当国之任奉勸請之、指其地以北野、又内府居住之地故曰小松、爾来治承・寿永忠房・師盛卿以下帰敬異、于他云云、応永頃当国刺史土佐前司弥沙道政中興造営云々、天文三甲午回祿云々、天文五丙申二月如意珠日 沙門堯覚敬白^(注4)

記載中の「当村庄官の家」は、小松村の庄屋のことと考えられ、小松村庄屋を務めていた小松家から本資料が発見された。また、引用部は全体の一部であるが、その内容はほぼ同一であり、今回紹介する「勸進状」の抜粋であると考えられる。

以上のことから、この「北野社勸進状」は、宝暦年間には既に府中小松村の小松家に所蔵されており、「丹後州宮津府史」編纂の際に編者が閲覧していたことが分かる。以後の地誌類には、ほぼ両書の記載を元に北野社の由緒が記されている。^(注5)

3 府中の大火記録

「勸進状」は、天文 3 年(1534) 4 月 28 日、北野社は「類炎」により、堂宇がすべて焦土と化したとする。一方、応安年間(1368～1375)の中興以降、兵火等による被害等について記されていない。本資料が記された天文 5 年は、府中兵乱が起きた文亀・永正年間から約 30 年しか経っておらず、この期間に兵火に遭っているとすれば、記載されて然るべきである。したがって、雪舟が描いた天橋立図に記された北野社は、この天文 3 年に火災に遭い焼失したものと考えられる。

この天文 3 年の大火については、他資料には見えず、規模や範囲については不明である。府中地区に被害をもたらした戦乱や大火の記録としては、武田・細川勢の戦乱の際に、一色氏が府中の町を自焼させた永正 4 年 5 月 5 日（「妙立寺厨子銘」）、国分寺の伽藍が焼失したとする天文 11 年 6 月 27 日（「国分寺略縁起」中「当時伽藍荒廃之覚」）の火災が記録として残る。^(注6)^(注7)

しかし、「類火」と記されることから、北野社単独の火災ではなく、周辺の焼失を含む大火であったことが推測される。『与謝郡誌』には、小松村の正音寺について、「長禄丁卯二月日養上人開基創立、永正四年成相对阿弥陀峯陣の兵燹に罹

り殆んど廃滅せしも、小松家の帰依により慶長五年再興」とするが、関連は不明である。

4 「勸進状」による北野社の歴史

「勸進状」によれば、北野社の草創は、79代六条天皇の永萬元年(1165)、小松内府と称され、当時丹後守だった平重盛が勸進したという。このため、この地を北野と名付け、また小松内府が居住した所を小松と称したとする。すでに16世紀前半の段階で、この地域が小松と呼ばれ、地名伝承として小松内府の説が存在していたことが分かる。

その後、歴代の丹後守らの崇敬も厚く、その霊験は「本社に替らず」、つまり京都の北野天満宮にも変わらないとされている。その理由として、この地が無双の霊場として与謝の海や天橋立が存し、背後には成相寺がそびえることを挙げている。次いで、鎌倉時代末期の仁治(1240～1243)・弘安(1278～1288)年間にそれぞれ修造があったのち、南北朝期にかけて修復が行われたが、その後は荒れ果てて年数を重ねたとする。その後、応安年間(1368～1375)になり、丹後国の刺史であった土佐前司沙弥道政が中興したとする。この沙弥道政は、明德5年(1394)、足利尊氏正妻赤橋登子の三十三回忌供養のため、成相寺に法華経を奉納している。

「勸進状」には、修復の年次が複数記録されており、作成当時には棟札もしくは本「勸進状」とは別の何らかの記録が残っていた可能性も考えられる。一方、北野社が中興する南北朝期には、丹後国分寺も荒廃から復興へと大きく舵を切っており、その国分寺再興は国を挙げた行事であったことが明らかになっていることから、隣接する北野社もこの時の再興の機運に乗じた可能性も考えられる。^(注8)

巻末には天文5年(1536)2月如意珠日と記される。如意珠日とは、吉日のことであり、中世の禅宗資料等に散見されるという。^(注9)さらに「勸進沙門堯覚」との記載から、「堯覚」という人物がこの勸進の中心になっていたことが分かるが、この人物の詳細は現段階では不明である。

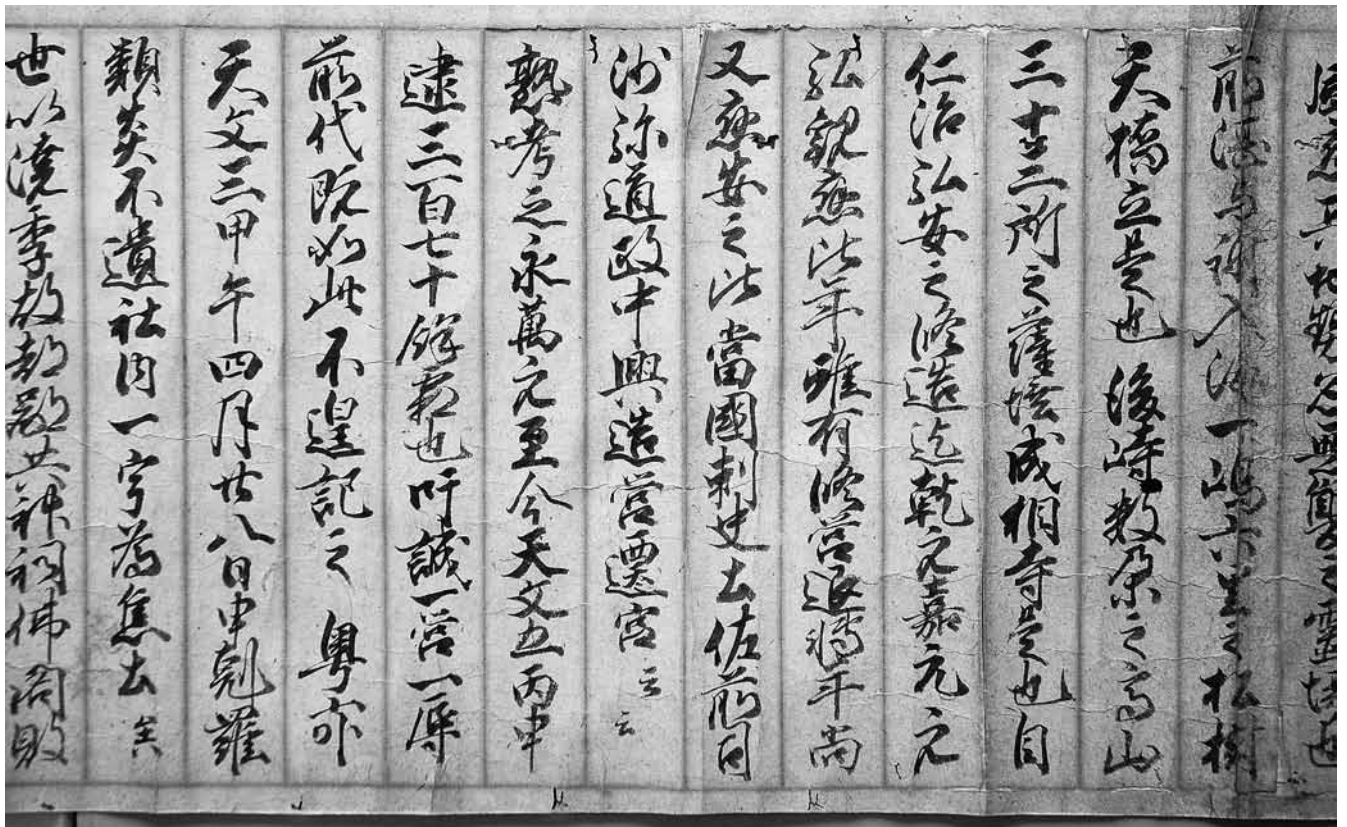
おわりに

今回は、紙数の都合上、記載内容の簡単な紹介にとどまったが、府中と拝師郷との関係や、連歌の伝承を載せている点など興味は尽きない。今後

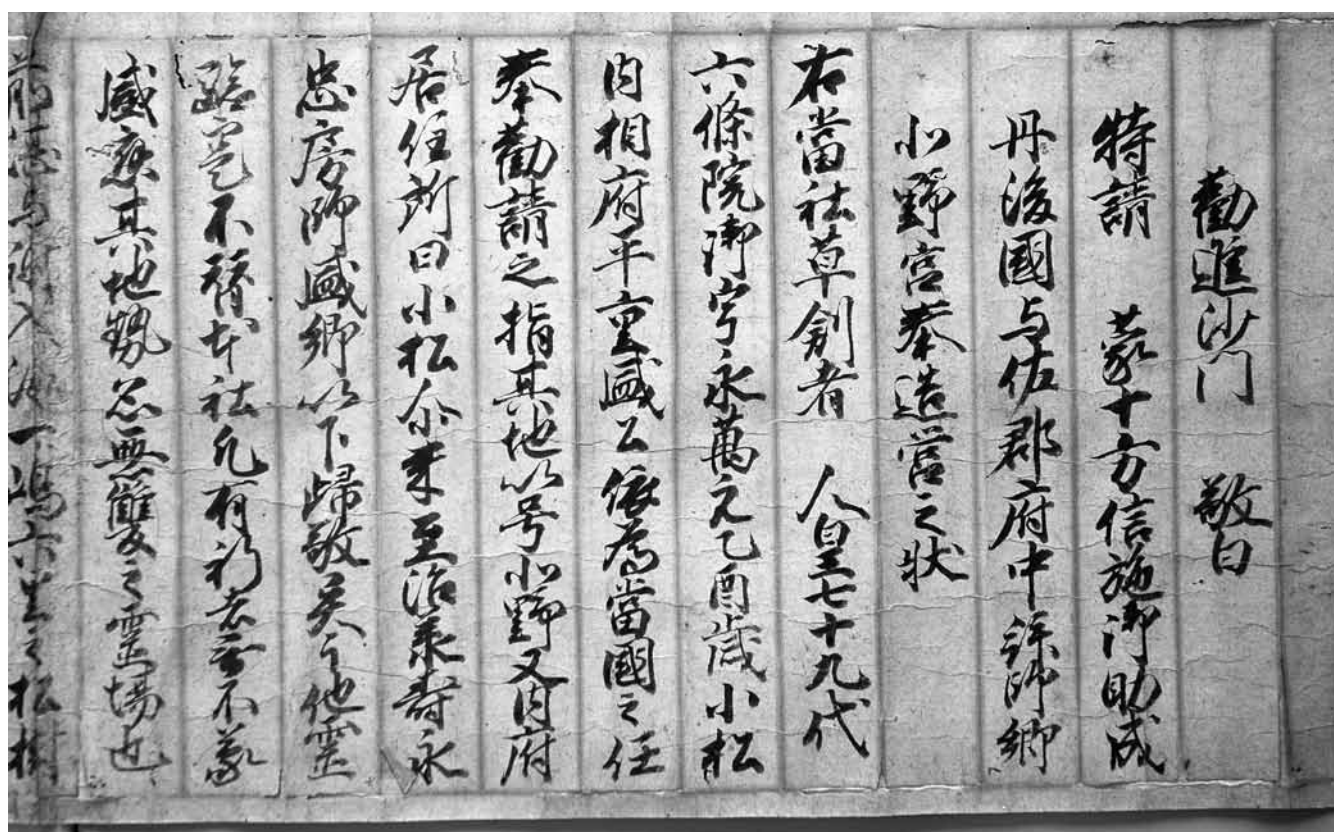
改めて詳細な分析を行いたいと考えている。なお、翻刻や釈文については、一部不明な点も残しており、誤りなどの点があれば御指摘を頂きたい。

参考・引用文献

- (注1) 雪舟筆「天橋立図」については、島尾新ほか『国宝と歴史の旅 11「天橋立図」を旅する』(2001、朝日新聞社)等に詳しい。
- (注2) 成相寺蔵の「丹後国田数帳目録」のうち与謝郡の記載中に、「一、天神堂 四段八十四歩 御免」との記載がある。この天神堂が小松の天神社に当たる可能性もあるが、詳細は不明である。
- (注3) 近世地誌類中に天神社関係の記載があるのは、享保11年の「丹後与謝海図誌」、宝暦11年の「丹後州宮津府志」、天明年間の「丹後旧事記」、文化11年の「丹後名所案内」、天保12年の「丹後府志」等である。
- (注4) 「宮津府志」には、返り点や送り仮名が記されている部分もあるが、引用に当たり省略した。なお、句点は著者による。
- (注5) 「丹後旧事記」の天神社の記載では、祭神を「天少彦命」とし、神伝曰として平重盛が永萬元年に勸進したことや、天文五年に勸進沙門堯覚が再建立したことが記される。加えて「堯覚歌合之会此時と伝ふ」とあり、「宮津府史」等に無い新たな情報が加えられている。
- (注6) 『宮津市史 通史編上』第二節「争乱の丹後」参照。なお、妙立寺厨子銘には、「去永正四〇丁卯五月五日、細川右京大夫殿中国之諸勢、被向当国乱入、身方より放火シ給、廳而可被運国安全タリ、爰同永正七年庚午六月廿日、住持入院ス、性者又野五郎清久より三十四子孫清直二男、十八代上人初弟子也、当寺滅亡依悲、高下大小貴賤雖勤、乱後タル間不及力(以下略)」とみえる。他に、妙立寺厨子については、小川信「丹後府中の発展と時宗・法華宗」(同『中世都市「府中」の展開』、2001、思文閣出版)に詳しい。
- (注7) 吹田直子「中世再興後の丹後国分寺の寺地移動について―寺蔵資料の記事を中心に―」(『京都府埋蔵文化財論集 第六集』2010、京都府埋蔵文化財調査研究センター)を参照。なお、この天文3年に北野社が焼失した大火と国分寺退転の関係は不明である。
- (注8) 丹後国分寺再興については、『宮津市史 通史編上』第七章「南北朝の動乱と丹後」、石川登志雄「丹後国分寺再興縁起について」(『丹後郷土資料館報第5号』1984、丹後郷土資料館)等に詳しい。
- (注9) 如意珠日については、加藤一寧「如意珠日について」(『花園大学国際禅学研究所論叢(一)』2006、花園大学国際禅学研究所)に詳しい。



天橋立是也、後峙数朶之高山
 三十三所之薩埵成相寺是也、自
 仁治、弘安之修造、迄乾元・嘉元・元
 弘・観応、此年雖有修営、退転年尚、
 又応安之比、当国刺史土佐前司
 沙弥道政、中興造営遷宮云々
 熟考之、永万元至今天文五丙申、
 逮三百七十余霜也、吁誠一宮一辱
 前代既如此、不遑記之、**■** 粵
 天文三甲午四月廿八日申刻、罹
 類災、不遺社内一字為焦土矣
 世以澆季故、都鄙共神祠仏閣敗
 壞滅亡、雖不限当社、眼前之事



勸進沙門 敬白

特請 蒙十方信施御助成

丹後國与佐郡府中拜師郷

北野宮奉造營之狀

右當社草創者 人皇七十九代

六條院御宇永萬元乙酉歲小松

内相府平重盛公依為當國之任

奉勸請之指其地以号北野又内府

居住所曰小松爾來至治承・寿永

忠房・師盛郷以下帰敬矣他靈

感寔不替本社凡有祈者無不蒙

感寔其地勢恐無双之靈場也

勸進沙門 敬白

特請 蒙十方信施御助成

丹後國与佐郡府中拜師郷

北野宮奉造營之狀

右當社草創者、人皇七十九代

六條院御宇永萬元乙酉歲、小松

内相府平重盛公、依為當國之任

奉勸請之、指其地以号北野、又内府

居住所曰小松、爾來至治承・寿永

忠房・師盛郷以下帰敬、異于他靈

驗寔不替本社、凡有祈者、無不蒙

感寔、其地勢恐無双之靈場也、

前湛与謝入海、一嶋六里之松樹



左遷、不忘其遺愛、梅飛千里、松
 生一夜、非情已如此、何況於有情之
 輩哉、於蒙無実讒言者、還着於
 本人之誓願、豈寔靈乎、各抽莫
 太之懇志、不憚些子之信施、乘
 此願力人者、以十一面觀世音之
 妙智力、速証菩提、依十六万八千
 眷属之擁護、永保福寿、必矣至
 祝至禱、勸進之旨趣、蓋以如斯

天文五丙申歲二月如意珠日

沙門謹白

勸進沙門堯覺

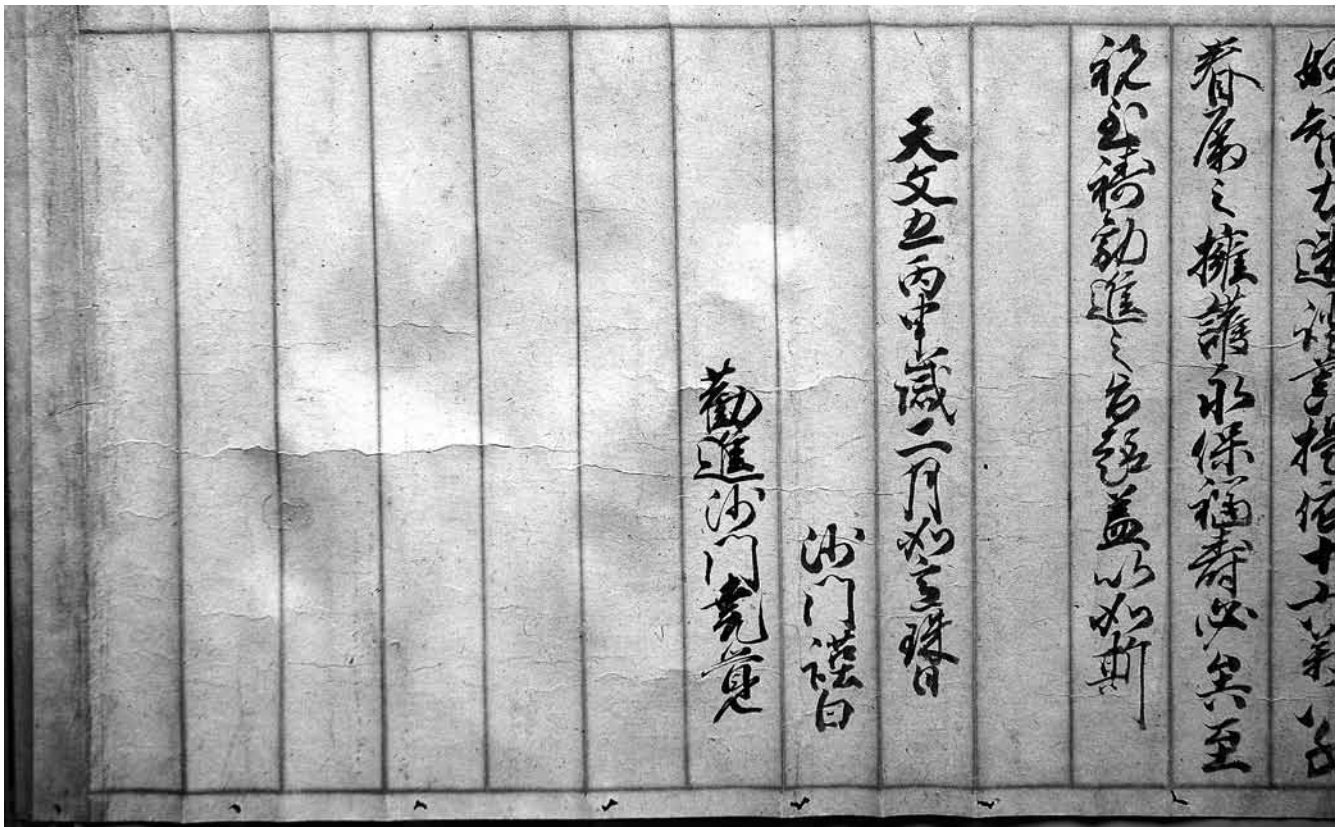


不勝悲淚者也、然間、社領無恒産、
国家不安靜、故無力企再営、於是
沙門某、扣当邦隣邦・有縁無縁・

貴賤門戸、奉勸大施少施・一紙半
文・升合杓撮之信施、不日積斧斤
之功、再欲拝廟食之営、不恐悦乎、
夫此神者十度宝号、殊以掲焉、或

号正覺真道如来、或名諸人宝王
乘願尊者、抑又本朝連歌元祖也
謂連歌者、末世真言陀羅尼也、

誰不信仰之、是故、携文道人者
親被風月之神助、祖武門族者
忽逞雷霆之威力、加旃昌泰海西



〔注〕

- * 拝師郷 与謝郡の郷名。現在の与謝海周辺。近世にも使用例がある。
- * 永万元年 一一六五年。
- * 治承 一一七〇～一一八一 * 仁治 一二四〇～一二四三 * 弘安 一二七八～一二八八
- * 乾元 一三〇二～一三〇三 * 嘉元 一三〇三～一三〇六 * 元弘 一三三二～一三三四
- * 観応 一三五〇～一三五二 * 応安 一三六八～一三七五 * 天文 一五三二～一五五五
- * 退転 衰退すること、中断すること。
- * 一宮一辱 一栄一辱か。一たび栄えたかと思うと、すぐ落ちぶれて恥ずかしめを受けること。
- * 澆季 道德の薄れた人情軽薄な末の世。
- * 恒産 一定の財産、決まった一定の職業。
- * 大施少施 大施餓鬼・少施餓鬼のことか。いずれも仏教行事の一つ。
- * 一紙半文 一紙半銭で、寄進等がごくわずかなありさま。
- * 升合杓撮 容積の単位を順にならべたものか。上（この場合は升）に行くほど単位が大き。
- * 信施 信者が仏法僧の三宝に布施したもの。
- * 釜斤 おの・まさかり。修繕のことか。
- * 廟食 みたまやにまつられること。
- * 本朝連歌の元祖 北野社の祭神である菅原道真は詩文にすぐれていたため、のちに連歌の守り神として信仰され、連歌の席に天神の名号軸や掛け軸が掛けられることがあつた。
- * 真言陀羅尼 密教の短い呪文である真言と、長い呪文である陀羅尼のこと。
- * 雷霆 かみなりのこと。菅原道真は横死後、怨霊となって都を襲い、御所清涼殿に雷を落としたとされた。
- * 昌泰海西左遷 昌泰四年（九〇二）に菅原道真が太宰府へ左遷されたこと。
- * 猥志 檀信徒から末寺または本山に進納する金銭などをいう。
- * 妙智力 不思議な仏智の力。仏菩薩のもつすぐれた知力。
- * 速証菩提 速証で、すみやかに悟ること。頓証菩提に同じ。
- * 至祝至禱 祝禱で、神官に依頼して神に祈ること。

〈釈文〉

勧進沙門、敬って白す

特に十方信施の御助成を蒙り、丹後国与謝郡府中拜師郷北野宮を造営し奉るを請ふの状

右当社の草創は、人皇七十九代六条院の御宇、永萬元乙酉歳、小松内相府平重盛公、当国の任たるにより、これを勧請し奉る、其の地を指して以て北野と号す、又内府居住せる所を小松と曰ふ、爾来治承・寿永に至り、(平)忠房・(平)師盛卿以下帰敬す、靈驗他に異なり、まことに本社に替らず、凡そ祈りあらば、感応を蒙らざるなし、其の地勢、無双の霊場と恐るる也、前に与謝の入海を湛え、一嶋六里の松樹、天橋立これなり、後ろにそばだつは数朶の高山、三十三所の薩埵成相寺これなり、仁治・弘安の修造より、乾元・嘉元・元弘・観応迄、この年修営ありといえども、退転して年尚し、又応安の比、当国刺史土佐前司沙弥道政、中興し、造営・遷宮すと云々、つらつらこれを考へるに、永萬元より天文五丙申の今に至るに三百七十余霜に逮ぶ也、吁誠に一営一辱、前代既にかくのごとし、これを記すに遑あらず、粵■、天文三申午四月廿八日申刻、類炎に罹り、社内一字を遺さず焦土となる、世澆季の故を以て、都鄙共神祠仏閣の敗壞滅亡すること、当社に限らずといへども、眼前の事、悲涙に勝えざるものなり、然る間、社領恒産無く、国家安静ならず、故に再営を企だつ力なし、是において沙門某、当邦隣邦・有縁無縁・貴賤の門戸をたたき、大施少施・一紙半文・升合杓撮の信施を勧め奉る、不日に斧斤の功を積み、再び廟食の営みを拝さんと欲す、恐悦せざるか、それこの神は、十度宝号、殊にもって掲げんや、或いは正覚真道如来と号し、或いは諸人宝王乗願尊者と名づく、そもそもまた本朝連歌の元祖なり、連歌と謂うは、末世の真言陀羅尼なり、誰かこれを信仰せざる、これゆえ、文道に携わる人は、親しく風月の神助を被り、武門を祖とする族は、忽ち雷霆の威力を逞す、しかのみならず、昌泰海西へ左遷、其の遺愛を忘れず、梅千里を飛び、松一夜にして生ず、非情已にかくのごとし、何ぞ況んや有情の輩においてをや、無実の讒言を蒙るにおいては、本人の誓願に還り着く、豈に靈を恐れんや、おのおの莫大の懇志を抽んじ、些子の信施を憚らず、この願力に乗る人は、十一面観世音の妙智力、速証菩提、十六万八千眷属の擁護により、永く福寿を保つ、必ずや至祝至禱、勧進の旨趣、けだしもつて斯くの如し、

天文五丙申歳二月如意珠日

沙門謹白

勧進沙門堯覚

平成 25 年度の資料整理

丹後郷土資料館では、昭和 45 年の開館以後丹後地域の考古・歴史・民俗資料の収集に努めてきた。しかし、収集される資料の量に対して担当職員だけでは整理作業が追いつかない状態となっていたため、平成 23 年度から臨時職員を雇用して計画的に整理を進めた。

1 民俗資料

(1) 分類収納

民俗収蔵庫が未整備のため、資料館本館内や複数のプレハブ棟などに未分類のまま分散収納されていた資料を、平成 23 年度に、衣・食・住・農具・漁具などに分類して収納作業したことにより、関連の収蔵箇所がおおまかに把握できるようになった。

(2) 漁撈具の整理

将来的な文化財指定を念頭に漁撈関係資料の基礎的整理作業を平成 24 年度から実施した。1 点ずつ分類番号添付（番号記載とラベル付け）、写真撮影、図面作成、調書作成、リスト作成を行った。

- ・漁具 762 点・船具 64 点・船板図 48 点
- ・製塩具 33 点

(3) 衣料の整理

衣生活資料のうち未指定の藤・麻・裂き織り・刺し子関係資料と芦田栄子コレクションの絵^{えがすり}拵資料の整理を行った。分類番号添付、写真撮影、リスト作成を行った。図面及び調書は未整備。

- ・刺し子・裂き織り資料 32 点
- ・藤・麻・科・葛資料 66 点

(4) 課題等

漁網や漁船は、計測や撮影を屋外で行う必要があり、作業が天候に左右されるため計画的に進まず一部しかできなかった。点数の多い漁網や船大工道具は今後の整理を待つ状態である。更に衣・食・住・農業・林業・職人関係など多くの資料が残されており、少なくとも分類番号添付とリスト作成は急務と考える。

2 考古資料

当館に保管している考古資料は、発掘調査による出土品が大半であるが、農地耕作中や工事中に不時発見されたり、分布調査の際、表面採集されたものなどもある。本年度は、それらの中から未報告の資料や復原作業が完了していない資料等を対象に作業を進めた。

(1) 墓ノ谷 12 号墳（京丹後市弥栄町）

- ・須恵器類の復原 10 点

本資料はすでに 1999 年に実測図等は報告されているが、展示に供する場合に備えて、補足的な石膏復原を行った。

(2) 久住遺跡（京丹後市大宮町）

- ・弥生土器の実測、一部復原 39 点

(3) 小松遺跡（宮津市小松）

- ・弥生土器の実測、復原 2 点

(4) 宮津市日置出土

- ・須恵器 短頸壺の実測、復原 1 点

(5) 京丹後市久美浜町鹿野出土

- ・黒色土器、土師皿の実測 8 点

(6) 宮津市国分出土

- ・須恵器の補修、復原 6 点

3 歴史資料

(1) 館蔵古文書目録のデータベース化

開館以来受け入れた古文書について、調査・整理を行いその目録を作成してきたが、刊行された古文書目録は一部に限られる。刊行に至っていない目録も多数あり、検索を容易にするためデータベース化を行った。ただし、文書によって目録作成方針が異なっていたため、作成日時・文書名・差出及び宛名・員数といった中核部分の情報に絞ってデータベース化した。整理済み点数と主な文書群は以下のとおりである。

- ・文書群 42 件、計 43,457 点

永島家文書、西原家文書、丹後漁業関係文書、品川家文書（整理中のものを含む）

(2) 館蔵古文書資料の目録整理

当館に寄付・寄託された未整理の古文書について目録を作成した。

今年度は臨時職員 3 名を中心に進め、11 件約

11,000 点の作業を終え、現在も継続している。

- ・加佐郡千歳村堀口家文書 約 2,600 点
江戸時代から明治時代にかけての庄屋関係資料や、近代行政資料等。一部を除いて終了した。
- ・竹野郡徳光村永島家文書 約 600 点
昭和 61 年及び平成 3 年に刊行された古文書目録掲載外の資料のうち、近世を中心とした古文書・絵図等。近世分を終了し、近代分については今後継続して行う予定。
- ・与謝郡日置上村山口家文書 約 7,000 点
前年に引き続いて実施。主として江戸時代の古文書であるが、一部明治時代頃の資料も含む。
- ・熊野郡襖裏貼文書 約 480 点
襖裏貼文書を襖から剥がした上で実施した。久美浜町の商家にあてられた文書が多く、熊野郡の地名や人物が散見される。
- ・上記以外に文書群 6 件、計約 400 点の整理を行った。

(3) 古文書調査

・安久家文書

昨年度に引き続き、千葉大学の菅原憲二氏を中心として、千葉大学の学生や地元の有志約 30 名で夏に実施した。平成 26 年度に目録の作成を終了する予定。

・三上家文書等

京都府立大学藤本仁文准教授を中心とする約 10 名で、主として海運関係資料の調査を行った。

4 写真整理

写真資料も開館以来撮影されたものが多く未整理で残されている。内容はモノクロ 35mm、モノクロ中判、カラーネガ 35mm、カラーポジ 35mm、カラーポジ中判、プリント写真である。従来は手書台帳への記載で整理を行っていたが、撮影点数、プリント数の増加に整理が追いつかなくなった。そのため検索ができず、印刷物・展示・写真提供などに迅速な活用ができない状態となっていた。

そこでデータベース化を行った。モノクロネガは完了し、カラーポジは継続中である。

- ・モノクロ 35mm ネガファイル 482 冊

- ・モノクロ中判ネガファイル 45 冊
- ・カラーポジ 35mm ファイル 20 冊

5 資料の受け入れ

今年度受け入れた資料は寄付 2 件で、下記のとおりである。

- ・宮津城下引札 約 100 点 宮津市 個人
主として明治時代の宮津町域の商店を中心とした引札。なお、平成 26 年度春の企画展で一部を公開する予定である。
- ・江戸時代銅製鏡 1 点 京丹後市 個人



民俗資料の整理



考古資料の整理



歴史資料の整理

2013 年度のあゆみ

4. 1 常設展「丹後の歴史と文化」(～ 3/30)
 4. 19 京都新聞コラム「建国 1300 年 丹後をひもとく」掲載 毎週金曜日 (～ 3/28)
 4. 20 特別公開 重要有形民俗文化財「裂き織りの道行着」ほか (～ 5/19)
 4. 20 春季企画展「古代・装飾・丹後－玉と文様と人々－」(～ 6/23)
 5. 11 古文書講習会
 (6/8、7/6、8/10、9/7、11/9、12/14)
 [午前:実践編、午後:入門編]
 5. 18 見て、触れて考古学
 (6/22、7/20、9/21、10/26)



5. 25 文化財講座①
 「出雲の玉と日本海交流」
 講師: 島根県埋蔵文化財調査センター企画員 深田 浩 氏
 6. 15 文化財講座②
 「丹後出土の玉類」
 講師: 丹後郷土資料館副主査 長谷川 達
 6. 15 友の会つどい (総会)
 7. 11 丹後府中語り部講座〔宮津市教委共催〕
 (7/25、8/8・22、9/12・28、10/10、11/4・14・28、12/12、3/7)
 7. 13 夏季企画展「寄り来る鯨－丹後・伊根浦の捕鯨－」(～ 9/23)
 7. 26 こども体験教室「鏡作り・銭作り」
 (8/2・9) [午前:鏡、午後:銭]
 7. 27 こども体験教室「勾玉作り」(8/3)
 7. 28 こども体験教室「古代のヨロイ作り」
 8. 3 文化財講座③
 「江戸時代人と鯨」
 講師: 慶應義塾大学助教 上野 大輔氏
 8. 7 千葉大学安久家文書調査 (～ 8/10)
 8. 24 こども体験教室「そば作り」
 (11/9・23、12/15)
 9. 21 特別公開 重要文化財「湯舟坂 2 号墳の金銅装環頭大刀」ほか (～ 10/20)

10. 12 秋季特別展 丹後建国 1300 年記念「丹後国府と中世都市『府中』～雪舟の描いた景観～」(～ 11/24)
 10. 12 細川忠興公・ガラシャ夫人誕生 450 年記念「丹後、細川家の事跡」(～ 11/24)
 10. 19 文化財講座④
 「丹後府中の中世・近世」
 講師: 丹後郷土資料館 技師 吉野 健一
 10. 19 友の会つどい (研究交流会)
 【友の会発足 40 年記念 丹後国印レプリカ】

 10. 26 丹後建国 1300 年記念シンポジウム
 「丹後府中を考える」(みやづ歴史の館)
 講演: 京都府立大学教授 上田 純一氏
 府文化財保護課主査 伊藤 太氏
 宮津市教育委員会 河森 一浩氏
 丹後郷土資料館技師 吉野 健一
 10. 27 府中歴史ウォーク
 10. 27 両丹地方史研究発表大会
 会場 舞鶴市西公民館
 10. 31 友の会研修旅行「秋の但馬を巡る」
 11. 1 蕪村まつり協賛特設展示 与謝蕪村筆「梅花図」ほか (～ 11/10)
 11. 16 文化財講座⑤
 「丹後の戦国時代と一色氏・明智氏・細川氏」
 講師: 熊本大学文学部附属永青文庫研究センター教授 稲葉 継陽氏
 11. 16 第 24 回紙すき教室
 (11/16・17・23・24・30、12/5・10、2/1)
 12. 7 こども体験教室「凧作りとお餅つき」
 (12/21、1/11)
 12. 14 企画展「京都の発掘成果展」併設
 「守り育てようみんなの文化財展」(～ 2/11)
 12. 20 コーナー展示「駒ならべ」(～ 1/31)
 1. 18 文化財講座⑥
 「最新の京都の発掘成果」
 講師: (公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 調査第 1 係長 中川 和哉氏
 2. 22 企画展「ふるさとミュージアムコレクション」(～ 3/30)

丹後郷土資料館調査だより 第 3 号

発行 2014 年 (平成 26 年) 3 月 28 日

編集 京都府立丹後郷土資料館

〒629-2234 京都府宮津市字国分小字天王山 611-1

TEL(0772)-27-0230 FAX(0772)-27-0020